

CSO

むすび vol.95
2015

Civil Society Organization
Magazine

CONTENTS

特集

サッカーで貧困問題を解決。
ホームレスW杯と
スポーツの社会的インパクト

開催レポート
CBフォーラムおおさか2014

PHOTO:今治

大阪NPOセンターが考えるCSO(市民社会組織 Civil Society Organization)とは、市民の観点から自発的・公共的な活動を担いながら、社会変革を目指している団体を総称したものです。社会的ミッションを軸として結集し、公共的利益や課題について行動するNPOのようなテーマ型組織に限らず、自治会やPTAといった地縁型組織や社会の問題解決に向けたSB(ソーシャルビジネス)やCB(コミュニティビジネス)を行なう社会的企業も含まれます。



サッカーで貧困問題を解決。

ホームレスW杯とスポーツの社会的インパクト

ライター／稗田 和博

「存在証明」としてのW杯

前号（vol.94）で紹介したホームレスの人だけが参加できるフットサルの国際大会「ホームレスW杯」。現在では世界50ヶ国以上が参加するなど、貧困問題解決の手段としてサッカー（あるいはスポーツ）を活用する流れは今や世界的潮流である―と前回述べた。

実は、この大会に日本も過去3度出場している。選手を派遣しているのは、雑誌販売でホームレスの仕事をつくる「ビッグイシュー日本」だ。同団体ではホームレスの自立支援に取り組んでおり、その活動の一環として生きる意欲や喜びを創出するスポーツ支援の一つにフットサルチームがある。チーム名は「野武士ジャパン」。2011年のパリ大会では7名の選手を派遣して、8日間にわたり熱戦を繰り広げた。

だが、ちよつと想像してみても欲しい。住所を持たないホームレスの海外大会参加がいかに難しいことか。海外渡航には当然ながらパスポートが必須だが、その取得には戸籍と住民票が必要であり、彼らの多くはそれが容易ではないのである。

例えば、パリ大会でキャプテンを務めたM選手（当時49歳）は、家族の失踪届けから10年以上が経過。戸籍上ではすでに死亡認定されており、「自分はこの世に存在しない人間」だった。だが、彼は「ここで逃げたら今までと同じ」と戸籍を回復。その過程で唯一の肉親である姉と11年ぶりの再会も果たした。彼にとってW杯の出場は、まさに自らの「存在」を取り戻すプロセスだった。

Mさんに限らず、パスポートの取得は自らの身辺整理とこれまでの人生を清算する良い機会となる。そこには十人十色のドラマがあるのだが、何らかの理由で自分を証明できず、出場を断念する選手もまた少なくないのだ。ホームレスがW杯のピッチに立つということは、単にサッカーの国際交流にとどまらず、決意と覚悟をもって社会的に自分が何者であるかを証明することを意味する。そして、その存在証明が自立への第一歩につながる。



▲開会式のパレードでパリ市内を行進

困難を抱えた選手の内なる戦い

パスポートの取得が一つの高いハードルなら、チーム内のコミュニケーションもまた選手たちには大きな試練である。社会生活から隔絶されたホームレスは、そもそもコミュニケーションを苦手とする者が多い。なかでもパリ大会のメンバーは、実に個性的だった。発達障害を抱えている者、うつ病で精神安定剤を服薬する者、手に障害を持ちながらアルコール依存症からの回復を目指している者……。いずれも重い過去を背負い、抜き差しならない現実と向き合っていた。なかでも唯一のサッカー経験者でチーム最年少のT選手（22歳）の生い立ちには驚かされた。彼は16歳のある日、突然、母親から自分が里親であることを知らされ、3日後に施設に行くよう告げられた。実母は出産直後に失踪しており、自分が孤児であることをその時に初めて知ったのである。一夜にして、家はおろか家族もお金もない生活に転落する高校生の人生がどういいうものか。私には想像すらつかなかった。

まるで世のあらゆる社会問題をかき集めたような、さまざまな困難を抱えた選手たち。そんな彼らのW杯は、海外チームとの対戦というよりはむしろチームメイトや自分自身との内なる戦いだった。若さとテクニクに勝る各国チームに大量点を奪われ、惨敗し続ける中で、チーム内では選手間の意見がぶつかり、互いの不満や怒りなどさまざまな感情が交錯したのだ。夜の宿舎で怒声とともに相手につかみかかる一触即発の場面もあれば、ミーティングでは一部選手がチームの輪から飛び出すこともあった。

なにより日本は過去のW杯で1度も勝つことがなく、「1勝」はチームの悲願。「パリに送り出してくれた多くの人たちやスタッフのためにも、1勝しないと日本には帰れない」と吐露する彼らは、勝敗に関係なくW杯を楽しむ海外選手とは対照的だった。

そうした中で、選手たちはむき出しの感情を抑え、相手を尊重し、辛抱強く話し合いながらチームとして最善を尽くす術を次第に身につけていった。チームは、勝利という共通目標のもとに集まった一種の疑似社会であり、その中で彼らも他者と深く関わる貴重な体験をしているようだった。

「人生の1勝」を目指して

チームの戦績は、0勝13敗。得点19、失点125。参加国48チーム中最下位という結果に終わり、念願の1勝もかなわなかった。選手たちの目には戦いきつた安堵とも悔しさともつかない涙がこぼれたが、思いは同行した関係者も同じだった。私自身、声が枯れるまで誰かを応援したくなつたのは初めてのこと、異国の地で嫌というほど敗戦の屈辱を味わいながら、それでもアゴを突き出して懸命にボールを追いかける彼らの姿がそうさせた。

同じように、現地では会場を通りがかつた日本人が観戦に加わることもあった。ホームレス問題に特別な関心はなくとも、スポーツだからこそ誰もが気がねなく関われるのだが、観客もまばらな日本戦の会場で女優の中山美穂さんを見つけた時には心底、驚いた。パリ在住の彼女は、サッカー少年のわが子に手を引かれて、たまたま会場に足を踏み入れたが、大会趣旨などを説明すると、すぐにその意義が理解できたようだった。「パリに住み始めてから社会問題に関心を持つようになった」と彼女は言っていた。そして、「私にできることがあるなら」と試合後のチームに合流して、選手たちに直接エールを送ってくれた。

また、連戦が続く中で、各国との交流も次第に深まった。言葉が通じなくとも、カンボジアやフィリピンなどアジアの国々の選手たちが、日本の応援席から声援を送る姿には胸を熱くしたが、なかでも韓

国チームとの親近感も特別だった。日韓戦では、不意に韓国席から「ニッポン!」コールが上がると、日本側からも「デーハミング!」のエール交換。両者の声援は試合後も会場に響き渡り、スポーツの素晴らしさを実感した瞬間だった。

帰国後、キャプテンのMさんは、選手を代表してこう語った。「自分たちは、みな一度は人生をあきらめた人間。でも、周囲のさまざまな人たちの力を借りて、ようやく人生のパスが回り始めた気がする。1勝は遠かった。でも、あきらめずにパスをつないでいけば、最後には人生の1勝をつかめると信じている」



▲日本チームの平均年齢は38.6歳

何者も奪えないスポーツの価値

W杯に限らず、サッカー(あるいはスポーツ)は、国籍や人種、年齢、性別といったあらゆる差異を超えて、その場を一つにする。ここでは、社会的立場も関係なければ、名前すら必要ない。普段の練習においても、

私たちはボールを蹴り始めた瞬間から誰とも喜びや楽しみを分かち合う。パリに集結した世界中のホームレスは、失う人生を生きてきた人たちである。仕事やお金、家のつながりさえも失い、あるいは奪われてきたが、W杯で生き生きと躍動する彼らの姿は「すべてを失ってもサッカーは俺たちのものだ」と言っているかのようだった。世界の貧困や格差がどれだけ広がろうとも、何者にも決して奪えないものがある。それを、私たちは「文化」と呼ぶのだ。

パリ大会にスペシャルゲストとして協力した元フランス代表のエマニュエル・プティは、スポーツの可能性についてこんな風に答えてくれた。「この大会で最も大事なことは、今まで人の目につかない存在だった彼らが、もう一度自分自身を再発見したこと。その大切な価値は、スポーツによってもたらされた。そして、決められたルールのもとで、それぞれの厳しい人生や生活、あらゆる立場の違いも乗り越えて、お互いが尊重し合える共同体を生み出すことができた。これこそ



▲インタビューに答える元プロサッカー選手のプティ(中央)

がスポーツの社会的インパクトであり、言い換えれば、それは社会の質そのものだ」

日本では、スポーツはまだ特定の限られた人のものである印象が強い。まして、ホームレスがサッカーをすることは批判も少なくない。だが、2020年の東京オリンピック開催は、スポーツを入口にした社会問題解決に取り組み良いチャンスである。その際、ホームレスW杯で得た経験は大きな財産であり、「野武士ジャパン」においてもホームレスだけでなく、さまざまな障害を持つ人や社会的に排除された人々を加えた国内フットサルリーグ「ダイバーシティ(多様性)カップ」の立ち上げが企図されている。その成否は未知数だが、スポーツがより深く私たちの社会に浸透した時、「ホームレスW杯の日本開催」も夢ではないと思っている。

執筆者プロフィール



ひえだ かずひろ
稗田 和博

1970年、大阪生まれ。立命館大学経営学部を卒業後、業界新聞記者を経て、30歳で独立。ホームレスの自立支援雑誌『ビッグイシュー日本版』の創刊から契約ライターとして企図する。NPOや社会問題の取材・執筆を多く手がける。ジャーナリスト兼企業社史ライター。

CB フォーラム おおさか 2014 開催!!



▲有限会社篠ファーム 高田成氏



▲(特活)DxP 今井紀明氏



▲有限会社 office ぱれっと 漆原由香利氏

今年度の特別プログラムとして、「作りたい未来・暮らしたい社会」をテーマに、CB・CSOアワードおよびソーシャルビジネスプランコンペ近畿の受賞団体を招いたパネルディスカッションを行いました。パネラーには(有)篠ファーム代表取締役 高田成氏、(特活)DxP 共同代表 今井紀明氏、(有)office ぱれっと代表取締役 漆原由香利氏をお招きし、コーディネーターは当センター代表理事 金井宏実が務めました。

過去に受賞できた理由についてお聞きしたところ、今井氏は団体の独自性・定時制の高校をターゲットにし、就学・就労支援をするという、「変わった観点」からの活動に共感してもらえたのではないかと答えました。高田氏も、自分の団体の要因は、斬新なアイデアで「オンリーワン」を買いた、「非常識」な商品開発が受賞の決め手になったのではないかと分析しました。この日は激辛野菜「ハバネロ」で作った新作ソースのサンプルをフォーラム

参加者に配布し、辛さが売りであることのアピールしました。一方で漆原氏は、補助金に頼らず受益者負担による運営をし、またスタッフも雇い、その人に合った働き方・就労の場を提供していることが、団体の安定性・継続性が評価されたのではないかと考えておられました。

受賞前後の変化についてお聞きしたところ、パネラー全員に共通していたのが、団体の信用の増進に繋がったこと。メディアに取り上げられ、広く知ってもらえて、事業拡大の手助けになったそうです。

一方、「団体運営の課題は何ですか」という質問に対しては、資金集めや関係者・連携先の理解が挙げられました。今井氏は融資を受け入れてくれる機関に困っていると述べ、今後はもっと企業との連携を考えているとのこと。漆原氏は、ぱれっとの理念に共感した保育者集めにまだまだ課題があるそうです。また、高田氏は、連携先の農家に新しい事業を説

明する際に時間がかかると話しました。田舎から都市への「野菜のおすそわけ」という新しい取組みを提案したとき、事業内容を理解してもらうまでのプロセスが長く、行政にも力を貸してもらい、一軒軒説得に回ったそうです。

今後の取組みとして、今井氏は「二人一人が未来に希望を持てる社会を目指し、引き続き若者の支援をしていきたい」、漆原氏は、「どんな人も安心して過ごせる居場所をみんなで作っていきたい」と答えました。高田氏は、限界集落のオリジナリティを生かした「幸せな農業」をさらにアピールし、若者が農業にあこがれを持てるよう日本の農業を変えたいと意気込みました。

最後にコーディネーターより、これからの社会は行政に頼ることなく、市民自らが自分たちのまちは自分たちで良くしていくことが大事だと述べ、締めくくりました。

【執筆者…大阪NPOセンターサポーター 李ハオ氏】

[CBフォーラムおおさか 2014 開催レポート]

魅力的な取り組みが多数寄せられた中、書類審査による一次選考を通過した6団体による公開プレゼンテーションが、11月22日(土)「CBフォーラムおおさか2014」にて行われました。審査を経て「大賞」1団体、「優秀賞」2団体、「奨励賞」3団体、大阪市長賞及び選考委員長特別賞について以下のとおり、決定しました!



「CB・CSOアワード2014」
受賞団体決定!!!

CB・CSOアワード2014 結果

大賞

団体名 特定非営利活動法人 スマイルスタイル
事業名 民間の職業安定所「ハローライフ」
事業概要と受賞理由 若年無業者や生活困窮者などを対象とし、金銭的利益にとどまらない広義な意味での価値を創造し、一人ひとりに合わせた伴走型ワークサポートや人材紹介、企業コンサルティングなど新たな就労モデルの開発や実践を行う事業。雇う側、雇われる側双方が企業を巻き込む力の高さや、社会的インパクトの高さが大変高く評価されました。

優秀賞

団体名 社会福祉法人 エクスクラメーション・スタイル・キョウト
事業名 若年性認知症の方への就労支援と居場所支援の取り組み
団体名 特定非営利活動法人 BBフューチャー
事業名 公益財団法人・日本少年野球連盟(ボーイズリーグ)に加盟する堺ビッグボーイズ(堺中央ボーイズ)の指導・運営サポート

奨励賞

団体名 特定非営利活動法人 フォロ
事業名 どんな子も丸ごと受け入れ、「いるだけでいい」が合言葉のフリースクール運営事業

団体名 特定非営利活動法人 多文化共生センター大阪
事業名 たぶんか進学塾(外国にルーツをもつ子どもを対象とした学習塾の運営)

団体名 特定非営利活動法人 遺族支え愛ネット
事業名 心のパトナタッチ事業~想いを家族に伝えて生きよう~

団体名 特定非営利活動法人 遺族支え愛ネット
事業名 心のパトナタッチ事業~想いを家族に伝えて生きよう~

大阪市長賞

団体名 セイコー運輸 株式会社
事業名 介護業界と葬儀業界を巻き込んだ「偲(しの)ふ心」の創造と展開

選考委員長特別賞

団体名 特定非営利活動法人 女性と子どものエンパワメント関西
事業名 CAP(子どもへの暴力防止プログラム)プロジェクト

11月22日(土)「CBフォーラムおおさか2014」にて第7回ソーシャルビジネスプランコンペ近畿の最終選考が行われました。今年度はセンターと専門家との連携をさらに強固にし、選考過程においても丁寧なブラッシュアップサポートを行いました。また、選考終了後も事業者間の交流会を実施するなどプランを審査・表彰するだけでなく、事業を実現するためのサポートも含んだ充実のプランコンペとなりました。最終選考においては、5団体によるプレゼンテーションが行われ、グランプリをはじめとした各賞が決定しました。今回の特徴は、これまであまりクローズアップされ



▲今年度の受賞団体のみなさん

第7回
ソーシャルビジネスプランコンペ近畿 結果



グランプリ

Silent Voice
デフ・コミュニケーション事業



準グランプリ

照明塾
あかりバンク



特別賞

Stick Theater
一都市一シアター劇団プロジェクト
特定非営利活動法人いけだエコスタッフ
家具と着物Remakeでモノと人をつなげるプロジェクト



選考委員長特別賞

大阪市立鶴見商業高校
地域連携プロジェクト
つるりっふと仲良し・エコ手洗いキャンペーン2015



▲5分間のプレゼンテーションが行われました



▲グランプリを受賞した「Silent Voice」

ることがなかった社会問題に、果敢に取り組む事業が数多く見られました。ユニークなプレゼンテーションに思わず聞き入りたり、また参加者からの投票の様子からも事業への関心が高いことが伺えました。受賞した団体はどれも魅力的な団体ばかりで、今後の展開が非常に楽しみです。センターとしても引き続き応援していきます!

第7回

ソーシャルビジネスプランコンペ近畿

社会を変えていく新しいプランが続々登場!

CSOサポーター育成

地域公共人材の今

地域公共人材『1期生』が活動しています。

2014年、大阪市地域公共人材養成プログラムを20名の方が受講されました。無事に研修も修了し、第2期の「地域公共人材」の養成の一步が終了しました。地域公共人材として登録が終了した後、様々な地域活動への派遣が行われていきます。



▲第2期のプログラム受講中の様子

地域公共人材は、地域に多様な協働(マルチパートナーシップ)を生み出して、活力ある地域社会づくりの一助となることを目的として派遣活動をしています。現在、派遣の申込みは、大阪地域のまちづくりセンターや地域で活動するNPOや地縁組織の方たちから希望をうけて、活動を行っています。今回はその活動の一部を紹介いたします。



課題

地域の広報誌が作りたい!



まず、広報誌にどのようなことを書いていきたいか、整理するために地域広報誌担当委員で会議しましょう。

広報誌をつくりたいけど、プロの様なデザインができない! そもそも、なにを書いたらいいの? なんて書いたらいいの?



地域公共人材



結果

地域のみなさんが自分たちの力でつくる「広報誌」に積極的に活動中!

課題

地域でイベントをしたい!



イベントを行うにあたっての会議をファシリテーションします。その中でイベントアイデアをふくらませて、実現可能なイベントに設計しましょう。イベントを実行する運営者も決めてスケジュールを明確にします。

イベントを考えたいけどどの様なイベントにすればいいか、具体的なスケジュールとかイベント設計をしたい。



地域公共人材



結果

イベント実行にむけた良い会議ができた!

とてもシンプルですが、シンプルな課題事項に対して成果を見えるカタチで求め、実行することは難しいものでもあります。地域公共人材として幅広く活動し、協働を生み出していくことを期待しています。

大阪市において、地域内の市民活動団体間の連携や話し合いによる合意形成促進等を、中立的立場のもと、地域活動をコーディネートし、話し合いの場でファシリテーションを担うことができる「地域公共人材」の発掘と育成が行われています。今回はその取り組みを紹介いたします。

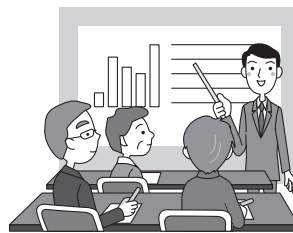
市民協働職員研修

9月〜12月上旬にかけて、地域と関わりのある業務を担当する大阪市職員を対象とした「協働」に関する研修を実施しました。これまで行政が主体となつて地域にサービスを提供していましたが、地縁団体や市民活動団体、企業など同じ目的をもつさまざまな主体が協力・連携し新たな形で地域をサポートすることで、より活力ある地域社会を生み出すことができます。このようなマルチパートナーシップを促進できる人材を育成することを目的とした実践型の研修です。

本研修は、協働の基礎知識を学ぶ「ステージ1」、地域社会をよりよくするために活動し、協働相手となりえる各主体の現場を訪れ現状や課題を知る「ステージ2」、そして「学び」「知った」ことを踏まえて、地域社会で活動している団体等のマッチングを行うコーディネート（つなぐ）のスキルをつける「ステージ3」という3つのステージで構成しています。

自身が担当する地域の魅力を、写真を見ながら共有したり、現場体験に行く前に各スタッフへのインタビューの練習をしたり、ロールプレイングで行政以外の立場

で協働を進める体験をするなど、従来の講座にはないプログラムも取り入れ、協働への理解を深めた約3ヶ月間でした。研修をを終えた大阪市職員の方々が今後地域に向き、地縁団体や市民活動団体、企業などをつないで各地で協働による効果が発揮されることを期待しています。



【プログラム】

ステージ1	
1	協働の目指すべき姿とは
2	良好なコミュニケーションをとるには
3	地域を見る視点を変える
4	相手に伝える手法を学ぶ
ステージ2	
1	現場体験に向けて～インタビューのポイント～
2	市民活動団体の現場体験 ※任意団体、NPO法人、企業など各自2団体を訪問
3	現場体験の振り返り
ステージ3	
1	地域社会におけるファシリテーションのポイント
2	ロールプレイで協働を体感①
3	ロールプレイで協働を体感②



▲現場見学前の講座では、団体さんに来ていただきインタビューの練習を行いました。



▲▼8つの現場へそれぞれ2ヶ所ずつ訪問する機会がありました。



▲ロールプレイでは行政・市民活動団体・地縁組織など役割になりきりマッチングを体験しました。

活動を知る ～パンジートーク2～



地域で活動している団体の取り組みを紹介する「パンジートーク2」を開催しています（全6回予定）。各回ごとにテーマを決め、地域や社会において、子どもや高齢者等の活動をおこなっている団体をゲストとしてお招きしています。取り組みを紹介するだけでなく、共通のテーマをもとに参加者全員で考え話し合う機会も設けています。参加者からの質疑では、「活動を始めるに至ったきっかけは?」「活動を継続する上で必要なこ

考えてみる ～魅力発信講座～

映像を通じて東成区の魅力について語り発信する、全3回の連続講座を開催しました。講師には、「映像発信てれれ」代表の下之坊修子氏をお迎えし、映像の撮り方や構図についての基



礎やインタビューの仕方、編集の方法などをレクチャーして頂き、最終的には東成の魅力発信動画を完成させました!動画はふれ愛パンジー内にて放映予定です。

とは?」「資金面はどうしているの?」など、率直な疑問を投げかける場面が見られ、団体の実情を知る機会となりました。



Vol.2

広域的活動から地域にも目を向けた活動へ

近年、地域活動や市民活動が活発化しており、社会や地域が抱える課題をビジネスの手法を用いて解決するコミュニティビジネスやソーシャルビジネスが注目を浴びています。その一方で、少子高齢化の進展など地域コミュニティを取り巻く環境は変化しており、人々とのつながりの希薄化や地域活動の担い手不足など、地域社会が抱える課題は多様化しています。当センターでは近年、広域的な活動から地域にも目を向けた取り組みを行ってきました。今回は前号に引き続き、東成区での活動く第2弾くをお届けします。

実践してみる ～イベントアイデア募集～

応募された事業は2015年1月～3月の間に実施を予定しています。随時ふれ愛パンジー公式ブログでご案内しますので、乞うご期待!!



東成ふれ愛パンジー

検索

ふれ愛パンジーでは、地域のみなさんに今まで以上に愛され、たくさんの方々が集えるような拠点を目指し、ふれ愛パンジーをさらに活性化するためのイベントアイデアを募集したところ、6件の応募がありました。12月1日に、3名の審査委員による審査会を開催し、現在は大阪NPOセンターによる応募アイデアのブラッシュアップを行っています。

ソーシャル ビジネス

Vol. 17



ソーシャルビジネス事業者紹介

特定非営利活動法人やまがた育児サークルランド

子育て環境の現状

昨今の日本では人口減・出生率の低下が叫ばれる中、子育て環境に関する問題もクローズアップされています。核家族化が進み都市部を中心に地域との関わりが少なくなる中で、若いお母さん・お父さん達は、祖父母や地域からの子育て支援を受け難い環境にあります。その他、共働きの増加で保育所に入れない子ども(待機児童数)の増加、シングルマザーに関する子育ての種々の問題など多々あります。

NPO法人やまがた育児サークルランドの取組

本NPO法人は「育児サークル」のネットワークが発原点。子育てしやすい地域づくりと、母親も父親もいきいきと子育てや仕事・市民活動ができる環境づくりの支援を行っています。

運営している子育て支援施設では、一時保育や子育て相談はもちろんのこと、保護者と子どもが広場にきて共にふれ合い、共感し、情報交換できる「おやこ広場」があります。そして働くママを応援する子育てとお仕事の両立講座もあります。

昨今核家族世帯が増加傾向にあり、地域社会での子育て支援の恩恵が受け難くなっています。特に都会などでは地域との関わりが薄く、子育ての悩みを隣近所に相談できず、子育て中の親の孤立感や負担感が増す現状もあります。

またシングルマザー等は収入面での問題があり、経済面での子育ての不安があります。

本NPOでは、「場」を作り、同じ子育てをする保護者に集まってもらうことで、子育ての悩み、孤立感や負担感の緩和や、子どもの虐待防止にも貢献しています。また、パソコン講座等で仕事に役立つ力を身に付けてもらうことで、経済面の不安解消の一助としても機能しています。

地域と子育てのこれから

本NPOの最大の特徴は、「子育て支援」という同じ志を持った人を育て、スケールアウトできる仕組みがあることです。本法人代表も意識的にスケールアウトできる人材を育てています。

同じ志の人が育ち、他の地域で子育て支援をすることで、様々な地域で子育て支援が広がっていきます。それは山形から日本全国へと広がり、この国の子育てに関する課題解決にもつながることでしょう。



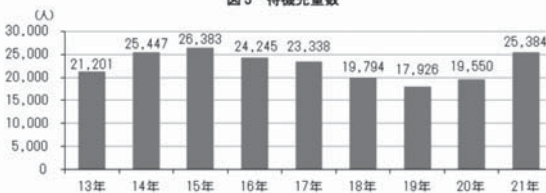
国立国会図書館 ISSUE BRIEF 保育制度の現状と課題より



(1) 待機児童の状況

厚生労働省は、入所申込を行ったにもかかわらず入所していない児童から、他に入所可能な保育所がある場合及び自治体の単独施策(認可外保育施設や保育ママ等)によって対応している場合を除いた児童を待機児童と定義し、その数を毎年公表している。平成21年4月の待機児童は25,384人に上り、前年と比べて5,834人、約29.8%の増加となった(図3参照)。2年連続での増加となり、増加数及び増加率は、現在の方法で統計を取り始めた平成13年以降で最高となった。育児休業の普及で働く女性が増えたり、景気悪化で共働きを望む人が多くなり、保育所の需要が増えたためと考えられる²¹⁾。

図3 待機児童数



(注) 各年とも4月1日時点の数値。

(出典) 厚生労働省ホームページの「保育所の状況等について」各年版を基に筆者作成。

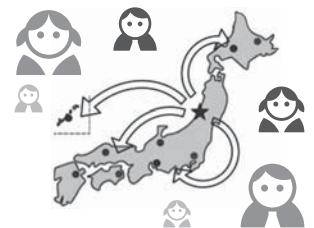
都道府県別では、東京都7,939人、神奈川県3,245人、沖縄県1,888人、大阪府1,724人、埼玉県1,509人、千葉県1,293人、宮城県1,131人と、7都府県で1,000人を超えた。一方、富山県、石川県、福井県、山梨県、長野県、鳥取県、香川県、佐賀県、宮崎県には、待機児童がいなかった。また、市区町村別では、横浜市1,290人、川崎市713人、仙台市620人、世田谷区613人、大阪市608人、名古屋市中区595人と都市部での待機児童が目立った。年齢別では、待機児童のうち0歳児が13.0%、1〜2歳児が68.9%を占めている。

²¹⁾ 待機児童約6000人増 2万5384人 増加率最悪 『読売新聞』2009.9.8.

(引用) ISSUE BRIEF 保育制度の現状と課題 国立国会図書館 ISSUE BRIEF NUMBER 667(2010. 1.28.)

スケールアウトとは

他地域に暮らす方と同じ価値観を共有し、情報やノウハウを積極的に提供・交換しながら、それぞれ地域に適したサービスを展開すること



会社情報 特定非営利活動法人 やまがた育児サークルランド

1998年3月発足。2003年NPO法人に。育児サークルが単独でできない活動をネットワークで開催してきた。2002年より市の中心市街地にて元百貨店のビルを活用し「子育てランドあ〜べ」を運営(山形市補助事業)、地域子育て支援拠点事業の草分けとなる。子育て当事者の視点を生かした子育て支援事業で、行政との協働も数多い。女性の自立支援にも力を入れ、2014年山形県のマザーズジョブサポート山形を受託。他に山形大学小白川キャンパス保育所運営など幅広く活動している。

[執筆: 大阪NPOセンターサポーター 七森 啓太氏]

認定特定非営利活動法人 大阪NPOセンター

第16回

定時総会のご案内

～正会員の皆さま～

平素は大阪NPOセンターの事業に格別のご理解、ご協力を賜り心より御礼申し上げます。下記のとおり第16回定時総会を開催致します。ご多忙とは存じますが、万障お繰り合わせの上、ご出席のほどお願い申し上げます。



日時：2015年2月25日(水) 17:00～18:00

場所：大阪ガスビルディング 3階ホール
(〒541-0046 大阪市中央区平野町 4-1-2)

◆大阪 NPO センターは認定 NPO 法人です。◆

当センターへの寄附は税制上の優遇措置を受けられます



寄附・領収証については、当センターのホームページよりお問合せいただくか、事務局までお尋ねください。

<http://osakanpo-center.com/>

大阪 NPO センター

検索



●発行／認定特定非営利活動法人大阪 NPO センター

編集委員 堀野 亘求、大前 藍子、中出 三千子、石地 恵里子、高見 理恵、小原 忠義、榮泰隆

〒541-0046
大阪市中央区平野町1丁目7番1号
堺筋高橋ビル5階 (旧大阪勧業ビル)
TEL: 06-6223-3303 FAX: 06-6223-3306
URL <http://osakanpo-center.com>

2015 年度会費納入のお願い

日ごろより大阪 NPO センターの活動に様々なご支援、ご協力を賜り誠にありがとうございます。

大阪NPOセンターの事業年度は1月1日から12月31日です。2015年度会費のお振り込みをよろしくお願い申し上げます。

■年会費 正会員・協力会員とも 10,000 円

※年会費は、消費税“不課税”です。

※会員有効期間：1月1日～12月31日